

特集

語り継ぐ平和への思い

～残された家族の思い～

多くの人々が傷つき、尊い命が失われた戦争。どれだけ時間が流れても戦争で負った心の傷や、かけがえのない人を失った悲しみは、決して消えることはありません。しかし、戦後77年が経過した現在、当時を知る人の高齢化が進み、その悲しみの記憶も、今後薄れていくことが懸念されています。今回は、戦争で父親を亡くした秋山愿さんの思いを通して、戦争の悲惨さ、平和の大切さについて考えてみましょう。

●父との突然の別れ

愿さんは、昭和17年（1942年）に父・寿夫さん、母・美和子さんの長男として生まれました。

昭和20年（1945年）6月、戦況が厳しさを増す中で、寿夫さんは臨時招集を受け、兵士として広島市へ行くことになりました。

当時28歳だった寿夫さんは、広島市の警備防衛や建物疎開（空襲での火災が広がらないようにあらかじめ建物を崩すこと）に従事していましたが、8月6日、広島市への原爆投下により命を落としました。この時、美和子さんは25歳、愿さんは3歳、妹さんは生後10カ月でした。

原爆投下から数日後、寿夫さんの戦



秋山 愿さん
80歳・総領町

高校を卒業後、総領町役場で勤務。退職後は、総領町議、合併後も庄原市議を務めた。
現在は、庄原市戦没者遺族会の総領支部長、広島県戦没者遺族相談員として活動している。

死の知らせが届きます。しかし、亡くなった場所が分からず、本人の遺留品もありません。戦死の知らせとともに、たった1枚の紙が入った白い木箱が届いただけでした。

愿さんは「今となつては紙に何が書いてあつたか分からないが、届いた箱をお墓に収めた」と聞いた。遺骨も何も残らなかつたということが、とても寂しかった」と悔しそうに話します。

愿さんの祖父は、寿夫さんの遺品や当時の足跡を探すため、2回ほど広島市を訪れましたが、手掛かりを見つかることはできませんでした。

愿さんは「身に着けていたものすべてが消滅してしまうほど、爆心地の近くにいたのだと理解した」と振り返ります。

壽夫さんの生い立ち

大正6年 1月4日	誕生
昭和13年 6月10日	広島輜重兵第五連隊に召集
昭和13年 7月30日	日中戦争のため、中国江蘇省へ出征
昭和15年 10月14日	復員
昭和16年 11月10日	結婚
昭和17年 1月28日	愿さん 誕生
昭和20年 6月20日	中国軍管区歩兵第一補充部隊に召集 広島地区第二四特設警備隊に編入(中国第一〇四部隊) 広島市の警備防衛に従事
昭和20年 8月6日	原爆により戦死

※輜重兵
戦場で食料などの物資を輸送する兵士



陸軍に在籍していたころの壽夫さん

●戦後の混乱を生き抜く

多くの犠牲と深い傷を残した太平洋戦争は、昭和20年8月15日、日本がポツダム宣言を受諾したことで、終わりを迎えました。

しかし、戦争が終わっても食料など物資の不足は続き、人々の暮らしはより一層苦しいものとなりました。

そんな戦後の混乱の中、美和子さんは幼い子ども2人を育てるために、農業で生計を立てていました。

愿さんは、美和子さんについて、「母は、当時のことをあまり話さなかったが、一家を支えていくというのは本当に大変だったのだと思う。全ては子どものため、と一生懸命働いて自分たちを育ててくれた」と当時を振り返ります。

また「小学生の頃、よその家にはお父さんがいるのに、なぜ自分のうちにお父さんはいないのか、と泣きながら家に帰ったことがある。母は、何も言わずに優しく抱きしめてくれた。小さい自分には戦争のことなど説明しきれなかったのだ、そうしてくれたのだと思う。それが今でも印象に残っている」と話します。

愿さんは、中学卒業後、長男として家を支えるために働こうと考えていましたが、美和子さんから「これからの時代は、高校へ行っておいた方がいい」と言われ、上下町の高校へ進学することを決めました。

美和子さんは、上下町の下宿先まで毎月お米1斗5升と、1500円(現在の1万5000円相当)を持って来てくれました。愿さんは、そんな母の姿に「高校への進学率がそこまで高くない時代に、高校へ通わせてくれたことにとても感謝している」と話します。

夫を亡くした悲しみを抱きながらも、懸命に働き、子どもを守る母の姿を目に焼き付けて生きてきた愿さん。「母の背中を見て、自分も家を守るために一生懸命働いた。父親がいないぶん自分がしっかりしなくてはいけない」と、強く思っていた」と自らの人生を振り返ります。愿さんの心の中には、戦後の混乱の中でも一丸となって必死に生き抜いてきた家族の姿がありました。

愿さんは、上下町の下宿先まで毎月お米1斗5升と、1500円(現在の1万5000円相当)を持って来てくれました。愿さんは、そんな母の姿に「高校への進学率がそこまで高くない時代に、高校へ通わせてくれたことにとても感謝している」と話します。



愿さんは壽夫さんの一生について一つの額にまとめ自宅に飾っている

●平和に関する活動

愿さんが、平和について深く考えるようになったきっかけは、40代のころに参加した、職場のハワイへの海外研修です。そこでは、現地のガイドから、日本軍の真珠湾攻撃について、悲惨な状況を聞きました。

「それまでは、父を亡くしたということもあり、戦争については一方的な原爆の被害や、その悲惨な出来事しか見ていなかった。現地で、日本軍が行った真珠湾への攻撃の様子をガイドから聞き、当時の情景を思い浮かべると、写真を撮るのも忘れてしまうほど、ショックで頭が真っ白になった」と愿さんは話します。

その頃から、「戦争は、関わったどの国にもひどい被害を与えるもの。アメリカが悪い、日本が悪いと考えるのではなく、戦争自体が起きてはならないものだ」と考えるようになりました。その後、愿さんは、庄原市戦没者遺族会と交流する中で、自身も遺族会の会員として活動することとなりました。

現在は、戦没者遺族からの相談に応じながら、戦争の惨状を後世に伝える取り組みや、戦没者追悼式の運営に携わっています。また、遺族会の活動の中でも、戦争の記憶・記録の伝承の方法について議論しています。

● 平和への思い

愿さんは、若い世代に伝えたい気持ちを次のように語りました。

「悲惨な戦争から長い年月を経た現在でも、父の命を奪った核兵器は、世界に1万発以上存在している。また、国際社会の緊張が高まり、ウクライナ危機のように、いつどこで戦争が起るかわからない状態となっている。新たな核兵器の犠牲者を出さないためにも、戦争はなくなければならない。」

当時のことを教科書や資料集で学ぶことはできるが、若い世代の皆さんには、ぜひ戦争の被害を受けた土地を訪れて、自ら見て、話を聞いてみてほしい。

私がハワイで感じたように、戦争や平和への認識が変わるきっかけになるかもしれない」

● 私たちができること

「戦争は悲惨なものである」ということは、だれもが認識しているものですが、具体的に何が起こったのかわからない人も多いのではないのでしょうか。これは、当時を経験している人に話を聞いたり、実際に現地へ行ったりして学ぶことで、改めて知ることができま

す。しかし、戦後77年が経過した現在、当時の様子を直接聞く機会は減り続けています。そして、今後80年90年と経過していく中で、いずれ話を聞くことはできなくなります。

傷を負った人、兵士として戦場へ向かった人、家族を亡くした人など、戦争を経験した人の悔しい思いや悲しい思い、戦後の混乱期を生き抜いた記憶は、貴重な財産として、受け継いでいかななくてはなりません。

私たちは、悲惨な記憶を忘れないようにするために、みんなで平和について学び、考え、平和の尊さを後世へつなぐ意識を持つことが大切です。

市は、巡回平和パネル展や平和啓発セミナーなど、戦争の記憶を風化させないための取り組みを実施しています。

この機会に、皆さんも戦争と平和について考えてみてください。

令和4年度庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表し、恒久平和を祈念するため、「庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典」を開催します。

なお、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、関係者のみで規模を縮小して開催します。

一般の人の参加はご遠慮いただきますよう、ご協力をお願いします。

とき 8月17日(水)10時

ところ 庄原市総合体育館
問い合わせ

社会福祉課障害者福祉係
0824・73・11210



庄原市巡回平和パネル展

高校生と被爆者との共同制作による『原爆の絵』

高校生と被爆者が共同制作した「原爆の絵」を展示します。

展示される絵は、基町高校の生徒が被爆者の記憶に残る光景を聞き取り、当時の惨状を丁寧に描いたものです。

この展示を通して、原爆や戦争の悲惨さなど、当時の記憶や記録を受け継ぎ、平和の尊さについて改めて考えることの大切さを再確認できます。ぜひご覧ください。

とき・ところ

▼8月10日(水)まで

市役所本庁舎 1階市民ホール

▼8月12日(金)～18日(木)

(土・日曜日除く)

口和自治振興センター ロビー

▼8月19日(金)～26日(金)

(土・日曜日除く)

総領自治振興センター 大集会室

※展示は各会場 8時30分～17時15分

※8月12日・19日の展示は11時から

です。

※8月10日・18日・26日の展示は11

時までです。

問い合わせ

総務課総務法制係

0824・73・1123